

令和7年3月12日

IR推進室

IR情報による八戸学院大学短期大学部の教育課程の検証について

短期大学部の教育課程についてIR情報を用いて、短期大学部の3つの方針を意識した3つの領域

「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」「B 教育の質」「C 学修成果」から分析し検証を試みる。3つの領域で根本的な問題がないと判断できた場合、教育課程の適切性が担保されていると結論づけることとします。

1. 各領域の検証におけるIR情報について

各領域の分析・検証に用いたIR情報は以下に示す通りです。

「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」の分析・検証に用いたIR情報

①2023年度生の卒業時の単位取得状況【資料A-①】(p3)

②学習時間・学修行動に関する調査結果(2023年度後期/2024年度前期実施)

Q『授業期間の学生の1日あたりの学習時間』【資料A-②】(p3)

「B 教育の質」の分析・検証に用いたIR情報

①卒業時アンケート(2022年度生)【資料B-①-1から3】(p4)(令和6年2月末実施)

Q5「知識や能力を身に付けるために、大学教育は役に立ったと思いますか」

Q6「学生生活に関した支援についてどう思いますか」

Q1から4「短期大学部の評価」

「C 学修成果」の分析・検証に用いたIR情報

①資料C-① 卒業要件を満たした学生のGPAの結果【資料C-①】(p5)

②卒業生に関する就職アンケート短期大学部2021年度生(令和6年7月実施)【資料C-②-1から3】

Q2-1『卒業生の能力評価』(p5)

Q2-2『施設への貢献度』(p6)

Q3『本学の学生に望むこと』(p6)

③2023年度八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握」調査報告書(2022年度生)

【資料C-③】(別資料)

2. 各領域の検証の結果について

IR 情報を用いた教育課程の分析・検証の結果については以下に示す通りです。

「A 学生の学ぶ意欲・姿勢」について (p3)

幼児保育学科の教育課程においては、卒業、保育士資格及び幼稚園教諭二種免許状の取得の必要単位数は 94 単位、介護福祉学科の卒業必要単位数は 96 単位であるが、両学科とも総平均取得単位数であっても、一定の割合を上回っています（幼児保育学科 106 単位、介護福祉学科 104 単位）【資料 A-①】。

このことから、修学期間内、学生はアドミSSION・ポリシーに示す人物像に見合う意欲と姿勢を堅持していることが読み取れます。また、授業期間中の 1 日あたりの学習時間については、2023 年度後期と 2024 年・前期分を再集計すると短期大学部全体（313 名）で「1 時間から 2 時間」に占める割合が最も高く（26%：82 名）、それより多い「2 時間以上」も高い割合（22%：66 名）になっています【資料 A-②】。卒業時の総単位取得数から勘案される過密な 1 日の中、これだけの学習時間を学生自ら創出し学びに向き合う意欲と姿勢を確認できることから、この領域の根本的な問題はないと考えます。学生の学ぶ意欲・姿勢を詳細に分析するためにも、授業評価アンケートの「Q2 この授業はどれくらい欠席しましたか。」「Q3 自分の授業を受ける態度も含めて望ましいものでしたか。」を今後、含める必要性がある。

「B 教育の質」について (p4)

2022 年度生の卒業時アンケートの教育の有用性の 6 項目において肯定的な評価「とても役立った/役立った」が、占有（93%以上）しています。専門的な知識・技術、社会人基礎力にかかわるものの見方・考え方、問題解決力など、ディプロマポリシーにある力の育成に対する教育効果の認識が読み取れます【資料 B-①-1】。学びを支える生活の支援でもすべての項目も肯定的な傾向があり（82%以上）（【資料 B-①-2】、短期大学部の全体的な評価の 4 項目においても肯定的な評価「強く思う（非常に満足）/思う（満足）」は、高い割合（93%以上）となっています【資料 B-①-3】。これらのことから、この領域の根本的な問題はないと考えます。しかしながら、教育の質の精緻な分析、検証には、アセスメントポリシーに即した多様な情報を統合した検証を行うことが欠かせないと思われます。

「C 学修成果」について (p5 からそれ以降)

2023 年度生の卒業時の GPA 平均（幼児保育学科 2.8、介護福祉学科 2.49）から、学生は科目の学修の成果を獲得していることが読み取れます【資料 C-①-1】。令和 6 年 7 月に実施した短期大学部の 2021 年度生（令和 5 年 4 月採用）の就職先での能力評価においても、3 項目「自己管理能力がある」（66%）「問題解決能力がある」（51%）を除く、8 項目で肯定的な評価「とてもある/ややある」の割合が非常に高く（72%以上）、これまでの調査と比較しても高水準となっています【資料 C-②-1】。施設への貢献度は、肯定的な評価「大いに貢献している/貢献している」の割合（95%）が大部分を占めています【資料 C-②-2】。今後の本学学生に望むことにおいて、「仕事に対する積極性」（21%）「社会人としての礼儀作法・言動等」（18%）、「職場での協調性」（16%）の順となっており【資料 C-②-3】、引き続き、教育課程（科目内容）の内容等において意識する必要があるかもしれない。このことから、本学の学修成果は、就職後にも通用する水準であると言えます。また、学生自身の学修成果の主観的な評価の結果である【資料 C-③】においても、学生自身が学びの積み上げ、成長を実感できていることが多くの項目で読み取れることから、この領域において根本的な問題はないと考えます。しかしながら、教育の質の精緻な分析、検証には、カリキュラムの領域ごと「教養/専門」の成績評価の割合や GPA などの情報等を加えることが欠かせないと思われます。

資料A-① 卒業要件を満たした学生の単位取得

	幼児保育学科		介護福祉学科	
	2023年度生（45名）	2022年度生（82名）	2023年度生（35名）	2022年度生（16名）
総取得単位数平均	106	103	104	99
最大	110	109	106	101
最小	87	90	102	99
中央値	107	103	106	99
標準偏差	4.14	3.07	1.54	0.98

保育士資格＋幼稚園教諭2種免許（38名）保育士資格のみ（3名）幼稚園教諭2種免許のみ（1名）卒業のみ（3名）

資料A-② 短期大学部における学修時間・学修行動に関する調査「Q授業期間中の学生の1日あたりの学習時間」

幼児保育学科	学年	回答者数	1：0から30分	割合	2：30分から1時間	割合	3：1から2時間	割合	4：2から3時間	割合	5：3時間以上	割合
2023年度後期	1年生	43	6	14%	15	35%	16	37%	2	5%	4	9%
	2年生	82	13	16%	19	23%	27	33%	13	16%	10	12%
2024年度前期	1年生	49	8	16%	15	31%	10	20%	7	14%	9	18%
	2年生	41	8	20%	6	15%	6	15%	5	12%	16	39%
幼児保育学科全体		215	35	16%	55	26%	59	27%	27	13%	39	18%
介護福祉学科	学年	回答者数	1：0から30分	割合	2：30分から1時間	割合	3：1から2時間	割合	4：2から3時間	割合	5：3時間以上	割合
2023年度後期	1年生	35	5	14%	6	17%	10	29%	7	20%	7	20%
	2年生	17	5	29%	4	24%	4	24%	1	6%	3	18%
2024年度前期	1年生	11	0	0%	2	18%	2	18%	2	18%	5	45%
	2年生	35	4	11%	4	11%	9	26%	10	29%	8	23%
介護福祉学科全体		98	4	4%	6	6%	11	11%	12	12%	13	13%
1年次全体			19	14%	38	28%	38	28%	18	13%	25	18%
2年次全体			30	17%	33	19%	46	26%	29	17%	37	21%
短期大学部全体			49	16%	78	25%	82	26%	48	15%	66	21%

資料B-①-1 卒業時アンケート「Q5 知識や能力を身につけるために、大学教育は役にたったと思いますか」

【4:とても役に立った 3:役に立った 2:あまり役に立たなかった 1:役に立たなかった】

項目	評価	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	合計
1) 専門分野に関する知識・理解	2022年度生 (97人)	64	66%	31	32%	1	1%	1	1%	97
2) 将来の仕事に関連する知識・技能	2022年度生	64	66%	29	30%	3	3%	1	1%	97
3) 幅広い知識・ものの見方・考え方	2022年度生	60	62%	36	37%	1	1%	0	0%	97
4) 問題を見つけ、解決方法を考える力	2022年度生	50	52%	45	46%	1	1%	1	1%	97
5) 地域社会の発展に貢献する力	2022年度生	45	46%	46	47%	4	4%	2	2%	97
6) コミュニケーション能力	2022年度生	60	62%	36	37%	1	1%	0	0%	97

資料B-①-2 卒業時アンケート「Q6 学生生活に関した支援についてどう思いますか」

【4:強くそう思う 3:思う 2:思わない 1:全く思わない】

項目	評価	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	合計
1) 学生指導に熱心な教員・職員が多い	2022年度生	41	42%	50	52%	5	5%	1	1%	97
2) 学修を支援する体制（奨学金など経済的支援）が充実している	2022年度生	38	39%	53	55%	6	6%	0	0%	97
3) 学生生活を支える体制（学生相談室・ハラスメント相談）が整っている	2022年度生	43	44%	47	48%	4	4%	3	3%	97
4) 学修関連の施設（図書館、実習室・教室等）や設備が充実している	2022年度生	39	40%	52	54%	6	6%	0	0%	97
5) スポーツ関連の施設や設備が充実している	2022年度生	33	34%	59	61%	5	5%	0	0%	97

資料B-①-3 卒業時アンケート 短大評価

項目1) 3) 4) 【4:強くそう思う 3:思う 2:思わない 1:全く思わない】

項目2) 【4:非常に満足 3:満足 2:やや満足 1:非常に不満足】

項目	評価	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	合計
1) あなたは、本学に入学してよかったと思いますか。	2022年度生	50	52%	44	45%	2	2%	1	1%	97
2) あなたは卒業後の進路に満足していますか。	2022年度生	37	38%	53	55%	7	7%	0	0%	97
3) 入学から卒業までの学生生活は充実していたと思いますか。	2022年度生	48	49%	46	47%	3	3%	0	0%	97
4) あなたは本学への進学を誰かに勧めたいと思いますか。	2022年度生	31	32%	63	65%	1	1%	2	2%	97

資料C-① 卒業要件を満たした学生のGPA

	幼児保育学科		介護福祉学科	
	2023年度生（45名）	2022年度生（82名）	2023年度生（35名）	2022年度生（16名）
GPA平均	2.8	3.1	2.49	2.83
最大	3.87	3.9	3.5	3.52
最小	1.37	1.91	1.32	2.09
中央値	2.81	3.14	2.45	2.8
標準偏差	0.619	0.475	0.55	0.42

資料C-②-1 短期大学部 卒業生に関するアンケート「本学卒業生の能力評価」

【5・とてもある 4・ややある 3・どちらともいえない 2・あまり思わない 1・まったく思わない】

項目		評価	5	比率 (%)	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	無回答	比率 (%)	合計
1) コミュニケーション能力がある	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	18	34%	20	38%	9	17%	5	9%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		19	29%	25	38%	10	15%	4	6%	2	3%	6	9.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		13	24%	23	42%	13	24%	3	5%	0	0%	3	5%	55
2) 理解力がある	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	16	30%	25	47%	8	15%	3	6%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		15	23%	28	42%	12	18%	3	5%	2	3%	6	9.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		10	18%	23	42%	13	24%	6	11%	0	0%	3	5%	55
3) 保育（介護）に関する知識・技術をもって適切な判断ができる	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	11	21%	28	53%	9	17%	4	8%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		5	8%	28	42%	21	32%	3	5%	2	3%	7	10.6%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		5	9%	21	38%	18	33%	5	9%	0	0%	6	11%	55
4) 責任感を持って職務を遂行できる	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	21	40%	19	36%	10	19%	2	4%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		26	39%	18	27%	12	18%	2	3%	2	3%	6	9.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		18	33%	19	35%	8	15%	6	11%	1	2%	3	5%	55
5) 問題解決能力がある	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	12	23%	15	28%	23	43%	2	4%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		4	6%	21	32%	27	41%	5	8%	3	5%	6	9%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		7	13%	15	27%	22	40%	8	15%	0	0%	3	5%	55
6) 自己管理能力がある	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	16	30%	19	36%	13	25%	3	6%	2	4%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		15	23%	20	30%	15	23%	6	9%	4	6%	6	9.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		12	22%	19	35%	14	25%	7	13%	0	0%	3	5%	55
7) 協調して仕事ができる	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	21	40%	21	40%	7	13%	4	8%	0	0%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		26	39%	20	30%	7	11%	4	6%	1	2%	8	12.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		17	31%	20	36%	13	24%	2	4%	0	0%	3	5%	55
8) ルールに従って行動できる	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	22	42%	23	43%	5	9%	3	6%	0	0%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		32	48%	16	24%	8	12%	3	5%	0	0%	6	9.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		19	35%	24	44%	6	11%	3	5%	0	0%	3	5%	55
9) 行事等に積極的に参加する	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	23	43%	20	38%	9	17%	0	0%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		34	52%	13	20%	9	14%	3	5%	1	2%	6	9.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		18	33%	18	33%	11	20%	4	7%	0	0%	4	7%	55
10) 向上心がある	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	20	38%	21	40%	10	19%	1	2%	1	2%	0	0%	53
	令和4年4月採用 (2020年度生)		19	29%	24	36%	12	18%	3	5%	2	3%	6	9.1%	66
	令和3年4月採用 (2019年度生)		15	27%	21	38%	11	20%	4	7%	0	0%	4	7%	55

資料C-②-2 短期大学部 卒業生に関するアンケート「本学卒業生の貴施設への貢献度について」

【5:大いに貢献している 4:貢献している 3:どちらともいえない 2:あまり貢献していない 1:貢献していない】

	評価	5	比率 (%)	4	比率 (%)	3	比率 (%)	2	比率 (%)	1	比率 (%)	無回答	比率 (%)	合計
令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	24	45%	21	40%	6	11%	2	4%	0	0%	0	0%	53
令和4年4月採用 (2020年度生)		24	36%	25	38%	6	9%	2	3%	1	2%	8	12%	66
令和3年4月採用 (2019年度生)		13	24%	29	53%	6	11%	3	5%	0	0%	4	7%	55

資料C-②-3 短期大学部「今後、本学学生に望むこと（複数回答可：無回答を除く）」

項目			回答数	比率	項目合計比率
1) 保育（介護）に必要な基礎的な知識・技術	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	17	12%	14%
	令和4年4月採用 (2020年度生)		28	16%	
	令和3年4月採用 (2019年度生)		22	13%	
2) 仕事に対する積極性	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	22	16%	21%
	令和4年4月採用 (2020年度生)		42	24%	
	令和3年4月採用 (2019年度生)		40	23%	
3) 仕事を完遂させる責任感	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	16	12%	10%
	令和4年4月採用 (2020年度生)		11	6%	
	令和3年4月採用 (2019年度生)		23	13%	
4) 職場内での協調性	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	25	18%	16%
	令和4年4月採用 (2020年度生)		25	14%	
	令和3年4月採用 (2019年度生)		30	17%	
5) 仕事の処理能力	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	9	7%	6%
	令和4年4月採用 (2020年度生)		10	6%	
	令和3年4月採用 (2019年度生)		8	5%	
6) 社会人としての礼儀作法・言動等	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	26	19%	18%
	令和4年4月採用 (2020年度生)		31	18%	
	令和3年4月採用 (2019年度生)		30	17%	
7) 保護者や利用者から信頼される人柄	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	19	14%	14%
	令和4年4月採用 (2020年度生)		26	15%	
	令和3年4月採用 (2019年度生)		23	13%	
8) 文章力	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	2	1%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)				
	令和3年4月採用 (2019年度生)				
9) 精神的安定	令和5年4月採用 (2021年度生)	件数(社)	2	1%	
	令和4年4月採用 (2020年度生)				
	令和3年4月採用 (2019年度生)				

2023 年度 八戸学院大学短期大学部「学修成果の把握」調査報告

2025 年 2 月 20 日

IR 推進室

1. 概要

本学の幼児保育学科の学生は保育士資格および幼稚園教諭二種免許状、介護福祉学科の学生は介護福祉士資格の取得を目指して入学する。学生の日頃の学習の成果は、定期試験やそれに基づく GPA、実習評価等によって測定され、また、学修成果を示すパフォーマンスもさまざまな機会に披露される。それとは別に、彼らの在学中の成長をより包括的な視点で把握するため、「学修成果の把握」調査を企画し 2020 年度より実施してきている。

調査の目的は学生自身の成長実感を把握し、ディプロマポリシーを検証すること、また、結果を授業やカリキュラム等の教育活動の見直しに繋げることである。本調査報告には、2022 年度生の 2 年間の変遷（第 4 回までの調査）が示されている。

2. 方法

(1)調査項目の作成

2020 年度に、各学科において学科長を中心としたプロジェクトチームを編成し、そこで学科のディプロマポリシーを基に評価の観点となる項目を作成した。評価のレベルは 4 段階（「入学時を想定した第 1 段階」から、「卒業時に達していることが望まし第 4 段階」まで）とし、各段階の評価基準を分かりやすい短文で表現するよう、それぞれの観点の主たる担当教員に依頼した。2021 年度に、両学科とも調査項目の改善に取り組み、評価の観点は幼児保育学科では 19 項目、介護福祉学科では 12 項目となった。その内容は各学科のページに記載している。

(2)調査の実施

評価方法は自己評価とし、グーグルフォームを用いて 2023 年度後期の試験期間に実施した。

3. 幼児保育学科について

(1)結果の概要

幼児保育学科のディプロマポリシーは表 1 の通りである。

表 1 幼児保育学科のディプロマポリシー

- | |
|---|
| 1. 健全で豊かな情操と、保育の基盤となる教養や総合的な判断力を身につけている。
2. 保育の専門的知識と技術を有し、子どもの発達過程に応じて豊かな保育環境を構成することができる。
3. 保育者としての責務を理解し、他の保育者や専門職者と協働して、子どもの最善の利益を追求することができる。 |
|---|

評価の観点のうち、①～④がポリシーの 1、⑤～⑯がポリシーの 2、⑰から⑲がポリシーの 3 に対応している。2022 年度入学生の結果を 6～9 ページに示している。

回収率は 97.6%（対象者は、2 年生 84 名）、有効回答率は 100%であった。

（2）カイ二乗検定の結果（表 2）

1）2022 年度生の結果

2022 年度生の 1 年次前期と 2 年次後期の結果において有意差が認められたのは、

- | |
|---|
| ①情操（ $\chi^2(3) = 12.79, p = 0.005$ ） ②対人的情操（ $\chi^2(3) = 11.232, p = 0.0105$ ）
③学びへの態度（ $\chi^2(3) = 16.969, p = 0.007$ ） ④判断力・課題解決力（ $\chi^2(3) = 10.162, p = 0.019$ ）
⑤保育（ $\chi^2(3) = 26.148, p = 0.0009$ ）
⑥福祉・養護（ $\chi^2(3) = 58.264, p = 0.000$ ） ⑦乳児・保健（ $\chi^2(3) = 35.848, p = 0.000$ ）
⑧教職の意義・教育理論（ $\chi^2(3) = 37.97, p = 0.000$ ） ⑨子ども理解（ $\chi^2(3) = 38.81, p = 0.0000$ ）
⑩障がい（ $\chi^2(3) = 31.01, p = 0.0000$ ） ⑪教育実践（ $\chi^2(3) = 47.31, p = 0.000$ ）
⑫音楽（ $\chi^2(3) = 15.25, p = 0.0016$ ） ⑬ピアノ（ $\chi^2(3) = 45.02, p = 0.0000$ ）
⑭美術（ $\chi^2(3) = 38.32, p = 0.0000$ ） ⑮健康（ $\chi^2(3) = 38.275, p = 0.0000$ ）
⑯文学（ $\chi^2(3) = 40.82, p = 0.0000$ ） ⑰保育者の責務（ $\chi^2(3) = 36.45, p = 0.0000$ ）
⑱他者との協働（ $\chi^2(3) = 30.36, p = 0.0025$ ） ⑲子どもの最善の利益（ $\chi^2(3) = 42.16, p = 0.0000$ ） |
|---|

の計 19 つの評価の観点（19 項目中 19 項目 100%）であった。

2 年次の調査である 2 年次前期と 2 年次後期の結果において有意差が認められたのは、

- | |
|--|
| ②対人的情操（ $\chi^2(3) = 11.805, p = 0.00808$ ） ③学びへの態度（ $\chi^2(3) = 8.125, p = 0.0435$ ）
④判断力・課題解決力（ $\chi^2(3) = 17.624, p = 0.005$ ） ⑤保育（ $\chi^2(3) = 10.963, p = 0.0119$ ）
⑥福祉・養護（ $\chi^2(3) = 15.162, p = 0.0016$ ） ⑦乳児・保健（ $\chi^2(3) = 16.207, p = 0.001$ ）
⑧教職の意義・教育理論（ $\chi^2(3) = 12.67, p = 0.005$ ） ⑨子ども理解（ $\chi^2(3) = 18.57, p = 0.0003$ ）
⑪教育実践（ $\chi^2(3) = 19.26, p = 0.0002$ ） ⑭美術（ $\chi^2(3) = 9.99, p = 0.0186$ ）
⑮健康（ $\chi^2(3) = 18.337, p = 0.0003$ ） ⑯文学（ $\chi^2(3) = 9.439, p = 0.0239$ ）
⑰保育者の責務（ $\chi^2(3) = 22.056, p = 0.0006$ ） ⑲子どもの最善の利益（ $\chi^2(3) = 10.755, p = 0.0131$ ） |
|--|

計 12 の評価の観点（19 項目中 12 項目 63.2%）であった。

(2)2022 年度生のディプロマポリシーの検証

2 年間の本学の教育課程を終えた 2022 年度生の結果について、3 つのディプロマポリシーの観点から検証を行う。

ディプロマポリシーの 1 に対応する「①情操」から「④判断力・課題解決力」において、1 年次前期と 2 年次後期の調査では、すべての観点項目において、評価段階 3 と 4（卒業時に達していることが望ましい）の割合が、62%以上（前年 53%）となっている（最小値は「②対人的情操」の 62.19%、最大値は、「④判断力・課題解決力」の 70.73%）。さらに、評価段階 4 の最大の占有率でも「②対人的情操」（15.85%）以外、30%以上となっている（最大値は、「④判断力・課題解決力」の 39.02%）。このことから、学生は保育の基盤となる人間性や教養、総合的な判断力について、学生は自身の肯定的な変化を認識していることが読み取れる。

ディプロマポリシー 2 に対応する「⑤保育」から「⑩言葉・文学」の 11 項目においても 1 年次前期と 2 年次後期の調査では、すべての項目で評価段階の肯定的な推移が確認できる。評価段階 3 および 4 の割合の占有率は、すべての項目で 52%を超え（2021 年度生は 7 項目が 50%以下）、7 項目で 60%以上となっている（最大値は、「⑭美術」の 69.51%、最小値は「⑩障害」の 52.44%）。

評価段階 4 に限っても、6 項目でその割合が 25%を超え、最大値は、「⑨子ども理解」の 41.46%（2021 年度生も最大で 17.86%）、最小値は「⑧福祉・養護」の 15.85%（「⑭美術」の 8.33%）であった。

この点については各観点項目の評価段階の規準の質的な差などの影響もあると考えられる。しかしながら、1 年次前期の調査における評価段階 3 及び 4 の合計割合は、最大値でも「⑫音楽」の 41.3%（最小値は「⑧福祉・養護」の 10.87%）のスタートから比較すると、2 年間の修学で、多くの学生が子どもの健やかな心身の成長を支える保育者の専門知識・技術の獲得の実感を得ていることが分かる。

ディプロマポリシーの 3 に対応する「⑰保育者の責務」「⑱他者との協働」「⑲子どもの最善の利益」において、1 年次前期と 2 年次後期の調査では、評価段階 1 及び 2 の割合が大幅に減少し、すべて項目では評価段階 3 と 4 の割合が、70%以上（2021 年度生は 58%以上）となっている（最大値は「⑱子どもの最善の利益」の 75.6%）。さらに評価段階 4 に限っても「⑰他者との協働」を除き、31%の占有率となり「⑰他者との

協働」も、25.61%であった。保育者としての職務内容・責任を理解し、他者との協働する力について、学生の成長実感を得ていることが読み取れる。

これらのことから、2年間の学びによりディプロマポリシーの到達が、学生自身の主観的評価から確認でき、幼児保育学科の教育課程の妥当性および効果が確認できる。

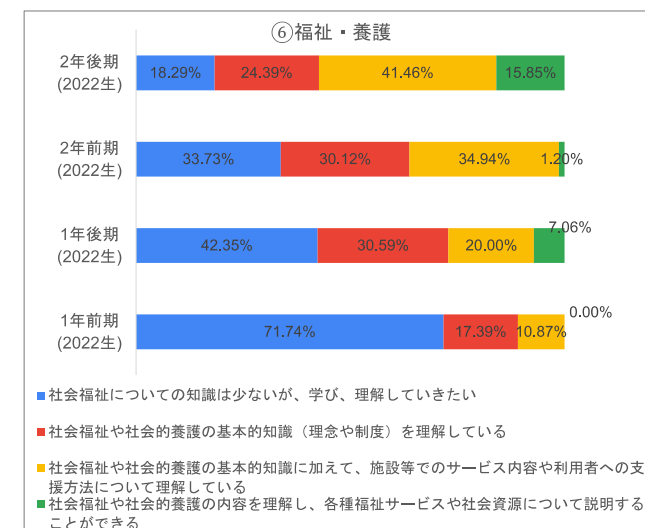
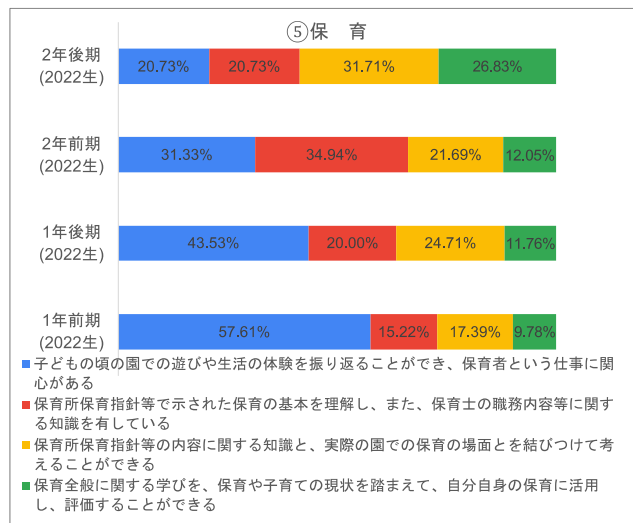
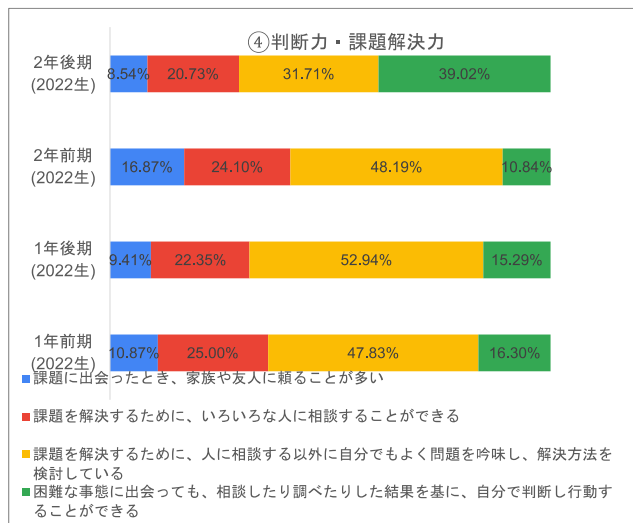
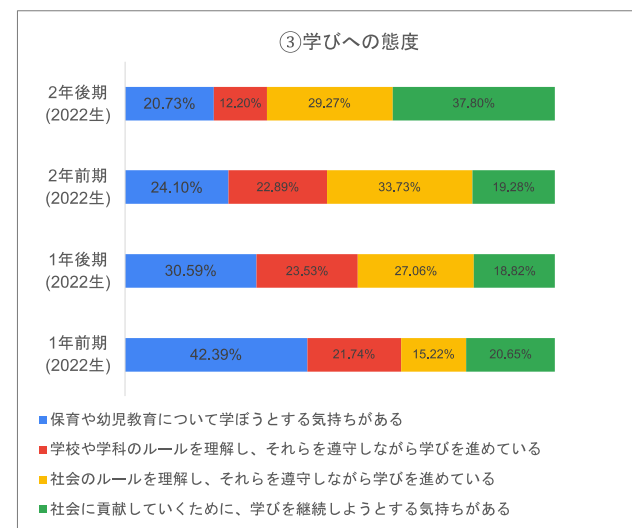
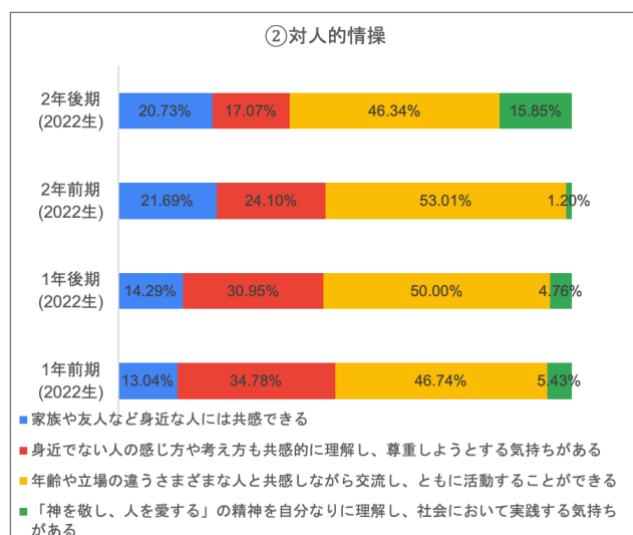
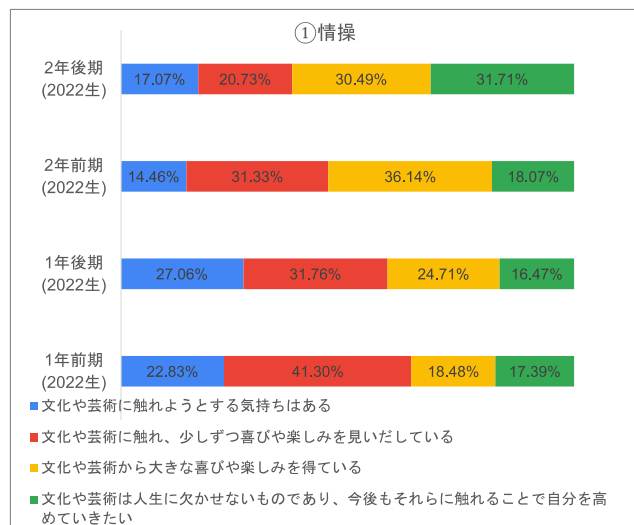
(3)教育活動の見直し

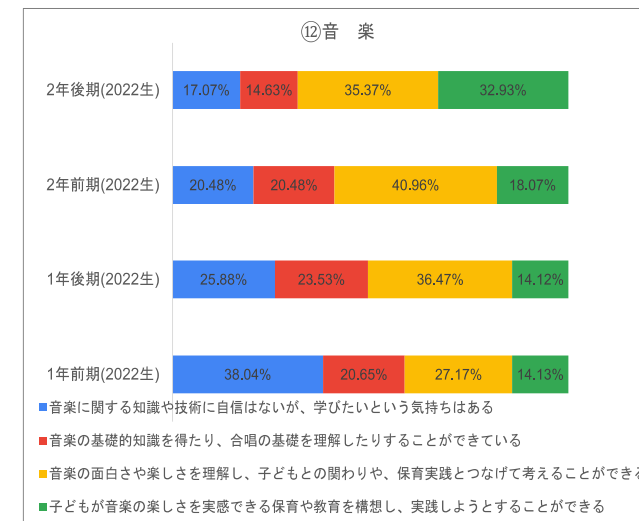
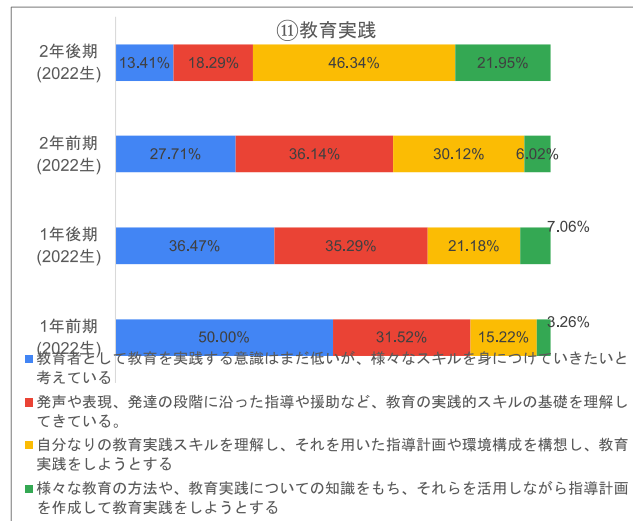
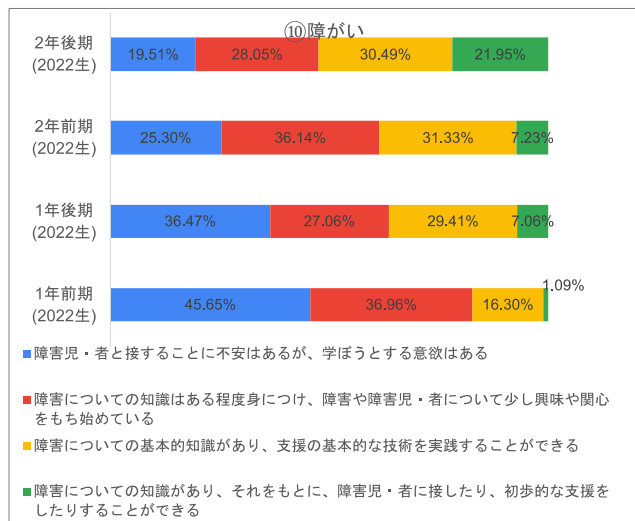
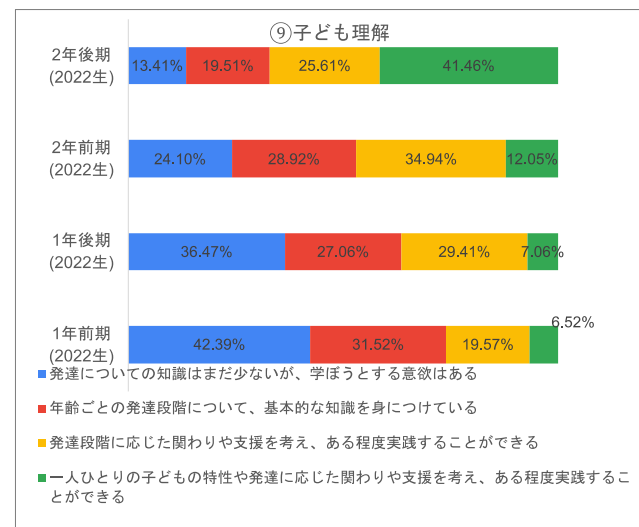
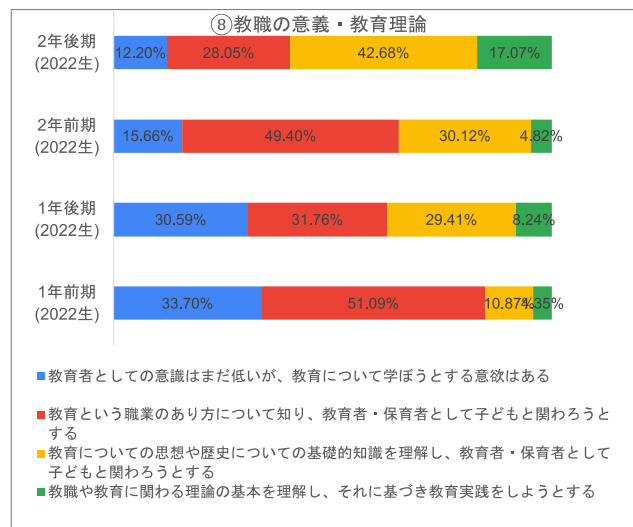
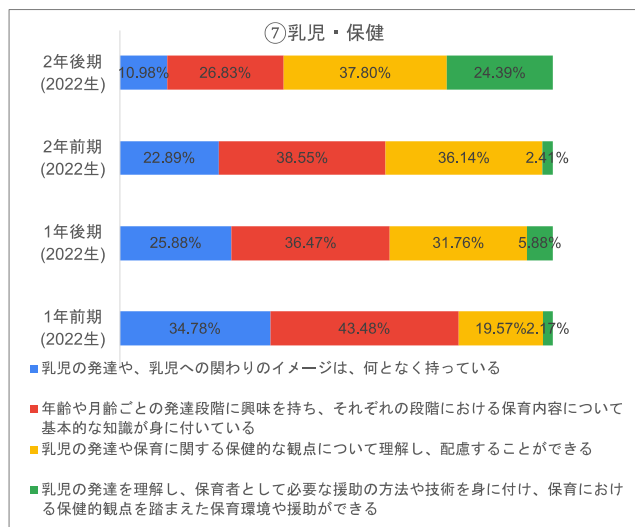
学修成果の獲得について、第1回調査（1年次前期）と第4回調査（2年次前期）を比較すると、全ての評価の観点項目において高い評価基準へと推移し、学生の主観的な成長実感が読み取れる。このことから本学のカリキュラムの中で、学生は自身の成長や変化について実感を得ながら、人としての育ち、専門的な知識・技術の学びを深め、自らの目標に向かう歩みを進められていることが分かる。とりわけ、2022年度の卒業生は、これまでの課題であったディプロマポリシー1「健全で豊かな情操と、保育の基盤となる教養や総合的な判断力を身につけている」において、高い評価基準まで到達している。さらに、ディプロマポリシー2及び3に関わる評価の観点においても、3及び4（卒業時に達していることが望ましい段階）の占有率も高くなっている。これらは、授業の運営・内容の構成等について、学科としての明確な方向性の中で、各科目担当者が継続してきた創意工夫が関連している可能性がある。今後も教育課程を担う科目担当者が、学修成果の内容への強い自覚を持ち、ディープラーニングに結びつくよう教育改善に積極的に取り組むことが重要であろう。

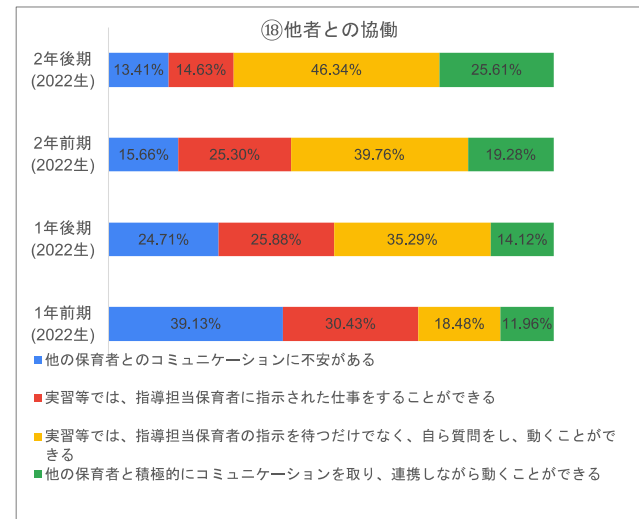
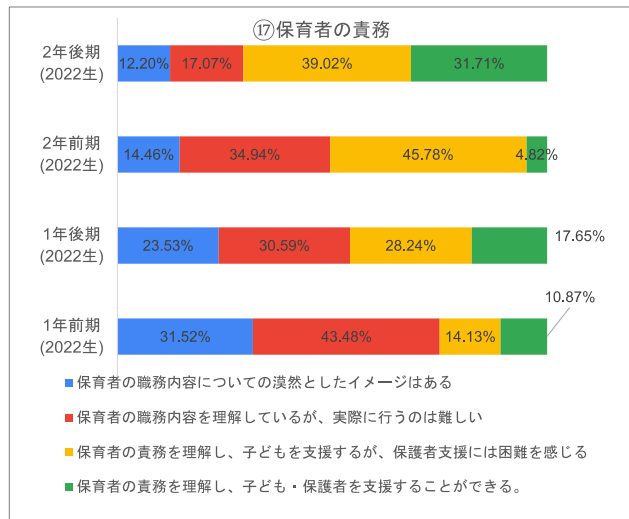
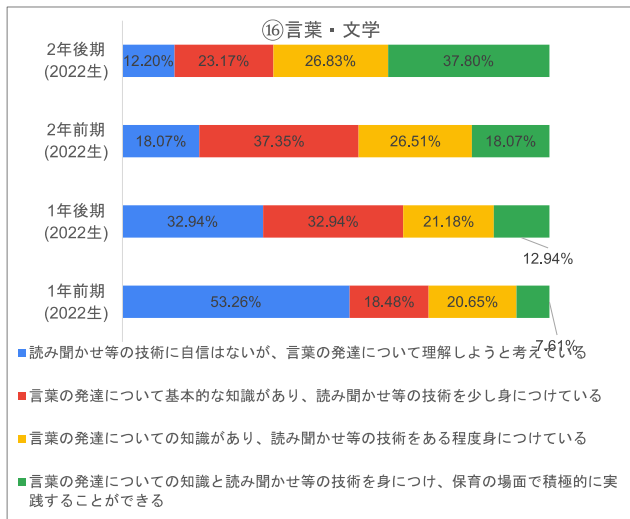
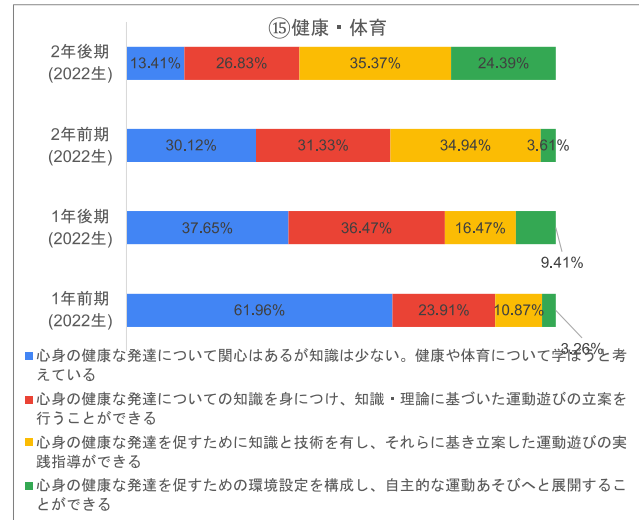
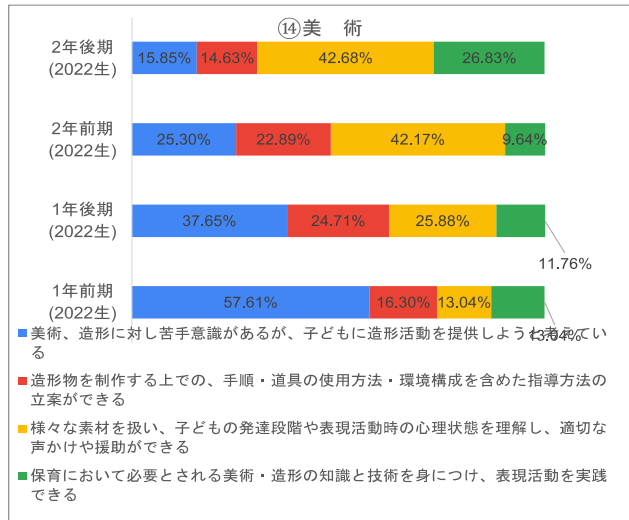
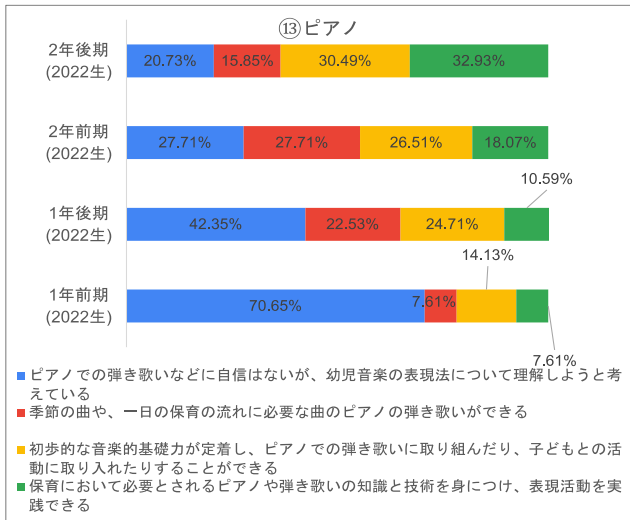
学生の学びの機会を多く得るという観点から、学科として推奨している学生の選択科目の積極的な履修を支える取り組みが求められるかもしれない。

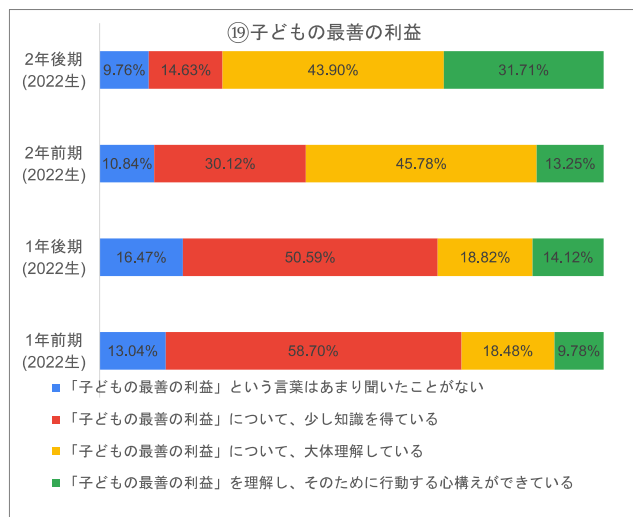
幼児保育学科の教育課程において、1年次の冬季、2年次の夏季に計画されている保育実習、教育実習は学生の重要な学びの機会である。学生は保育者の姿、子どもの姿から、座学で得た知識・理論や技術の確認や新たな学びを獲得し成長する機会となっていることもうかがえる。一方で、専門職として求められる力への意識の高まり、自分自身を見つめ直す機会となることが、一旦ネガティブな評価への推移からも読み取ることができる。この点からも実習生として直面し経験する困難さ、学生の育ちの現在位置について、学科として共通理解を図る機会を確保した上で、教育活動を展開することが、重要であろう。今後、学生の学修成果の主観的評価を含め、アセスメントポリシーに即した分析を行うことで、学科としての発展に向けた改善を続けていくこ

とが必要であろう。









4. 介護福祉学科について

(1)結果の概要

介護福祉学科のディプロマポリシーは表 2 の通りである。

表 2 介護福祉学科のディプロマポリシー

介護実践の基盤となる教養と総合的な判断力および豊かな人間性を身につけている。 1.あらゆる場面に汎用できる介護の知識と技術を有し、自立支援の観点から、身体的な支援だけではなく、心理的・社会的支援を展開できる能力を身につけている。 2.利用者や家族の援助のためのコミュニケーション能力、的確な記録・記述ができる能力及び介護過程を多職種協働チームにより展開できる能力を身につけている。 3.介護ニーズの複雑化・多様化・高度化に対応し、利用者や家族等のエンパワメントを重視した支援ができる。 4.生活の質の維持・向上の視点を持って、利用者の状態の変化に対応できる。

2022 年度入学生の評価の観点のうち、①がポリシーの「豊かな人間性」に対応し、②～⑬がポリシーの詳細に対応している。2022 年度生の調査の結果を 12 ページ以降に示す。学生の休学者等を除く評価対象者は、19 名（2 年次には 17 名に減）であり、回収率および有効回答率は 100%であった。

(2) フィッシャー検定の結果

2022 年度生の 1 年次前期と 2 年次後期（最終評価時点）の結果において有意差が認められたのは、次の評価の観点であった。

⑨ 医療的ケア (p=0.0388)

また、2 年次の調査である 2 年次前期と 2 年次後期の結果において有意差（傾向）が認められたのは、次の評価の観点であった。

④多様な生活の理解 (p=0.0388)

(3) 2022 年度生のディプロマポリシーの検証

ディプロマポリシーの最終的な到達に関しての観点で検討すべき評価項目は、「①豊かな人間性」が挙げられる。到達を示す評価段階 4 の割合が少しずつ増加していく傾向が見られつつ、学び始めのレベルを示す評価段階 1 の割合の増加も見られ、最終評価時に半数を超えてしまっている。こうした評価が下がったように読み取れる傾向は、

この 2022 年度生だけに限らず、2021 年度生にも同様の傾向があったことから、ディプロマポリシーの評価において、評価基準もしくは 4 段階の文言に再検討の余地があったと思われる。この「学修成果の把握」調査の目的は、冒頭で示したように、“学生自身の成長実感を把握し、ディプロマポリシーを検証する”ものであり、それに逆行した結果となった。一方で、2023 年度以降の入学生に対しては、介護福祉学科のカリキュラムに修正が加えられ、ディプロマポリシーもより具体性が増し明確化した内容となり、それに伴い学修成果の評価内容も修正が加えられ、学生自身が評価しやすく、ディプロマポリシーの達成を多面的に捉えることができるようになったと思われる。修正については、本報告の趣旨ではないため、課題提起までにとどめておく。

また、「①豊かな人間性」のように、評価段階 4 の割合が少しずつ増加しつつ、評価段階 1 の割合の増加も見られ最終評価時に半数を超えてしまった傾向は、他にも「⑤生活者を取り巻く環境」などの「領域：人間と社会」に関連する項目に見られた。

しかし、他の学修領域の項目である「⑧生活支援技術」「⑨医療的ケア」では、最終評価時点で、評価段階 1 の減少（⑨医療的ケアは 78.9%から 41.2%へ大幅減）とともに評価段階 4 の値が増加（⑨医療的ケアは 5.3%から 23.5%へ大幅増）したことは特筆すべき成果であり、実技演習や実習などの体験的な学修の機会が学びの効果を上げることを示唆するものであると言える。ディプロマポリシーに示す“自立支援の観点から、身体的な支援”ができる技術が備わったと捉えることができよう。特に「⑧生活支援技術」の項目では最終評価時点（2 年次後期）には評価段階 4 が多く、それぞれ“移動”は 29.4%、“排泄” 29.4%、“清潔と入浴” 23.5%にまで高まった。体験的な学修の機会を今後、「領域：人間と社会」にまで広げていくことで、ディプロマポリシーの達成を高めることが期待される。この点については、次の「教育活動の見直し」において述べる。

（４）教育活動の見直し

今回を含め過去の結果から考察すると、本学のカリキュラムでの専門的な知識・技術の学びのあり方を考えるにあたり、実習室での実技演習や介護施設での介護実習の体験的な機会を用いての教育方法は、大いに評価すべき点があるものと思われる。現場での実践から体感的に学ぶことは、単純に経験を言語化することにとどまらず、学生が自ら醸成してきた介護観や倫理観を実践する機会でもある。こうした機会は、介

護福祉士としての資質を高めることにもつながり、就職先でのコンプライアンスの理解や権利擁護の実践、リーダーシップの発揮などに生かされ、社会において中核的な役割を担う人物への成長が期待できるものと思われ、また本学科のディプロマポリシーの目指す地域に貢献する人材づくりにも重なる。本学の取り組みとして地域貢献活動が挙げられるが、介護福祉学科においても学科開設時より、教員が研究活動以外にも社会活動や、社会教育活動に積極に取り組み、八戸を中心エリアとする地域社会をフィールドとした活動が、学科の多彩な学修カリキュラムにつながっていると言えよう。今回報告の 2022 年度入学生の後の学年からは、新しいカリキュラムとして、「地域文化論」が科目として加わり、課外で行う地域でのボランティア活動も盛んになるなどし、介護福祉の対象となる“生活”が「文化」や「伝統」に根ざしていることを学ぶ機会がその年々で設けられるようになった。その成果については、後続の報告にて述べることにしたい。まずは、現在の地域をフィールドとした体験的な学びの機会を得るに至った下地づくりが、学科開設から今回報告対象の 2022 年度入学生までの学年の養成課程の中で培われてきたことは、本学科の特色となる教育活動の成果として示しておきたい。この 2022 年度入学生でも、八戸流し踊りへの参加や、介護施設へのバス見学など、地域をフィールドとした体験的な学修の機会が設けられてきた。

2 年間のうちに 4 回設定されている介護実習のような介護現場での体験的な学修機会や、地域社会での文化に触れる体験的な学修機会を経て、学生が自らの成長を確認できるように、「生活」や「文化」といった人間性に着目した授業を展開することで、ディプロマポリシーに示す“豊かな人間性”を養うことができるものではないかと本調査結果から示唆を得られたように思われる。

